

## 高校生の取り組みの様子

はじめに、3日目の最後の企画、「文章の力を磨くためのワークショップ」のねらいについて、①書くことには目的があり、その目的をはたすために効果的な書き方をすること②人の文章を、目的をうまく果たしているかという観点から評価することができるようになること③その評価を考慮に入れて、自分の文章をブラッシュアップできるようになること、と話されました。

次に、イントロダクションとして、「私たちはなぜ文章を書くのか？」について①「おとなは何らかの目的のために文章を書く」②「文章を書く究極目標は「幸せに生き延びること」として、足利事件と菅家利和さんの手紙の例を紹介されました。何を書いていいかわからなかったという読書感想文の宿題の思い出についてのエピソードは、高校生にも共感できる内容でした。(附属学校では、読書感想文ではなく、さまざまな「コンクールへの応募」が夏休みの課題)

そして、「文章をかくために一番最初に考えなくてはならないことは、『他人の立場に立つこと』で、目的を果たせる文章が『よい文章』、だからよい文章は一つではない。相手と目的によって、いくつもの文体を書き分けられる人が文章の達人」と話されました。【インタビューを頼むダメ・メールの例】の課題は、高校生には当り前のことでした。(総合人間科でフィールドワークの依頼文を作成)

いよいよ「文章の力を磨くためのワークショップ」の課題に取り組みました。課題は「描写してそれを伝達するゲーム」です。二人一組で封筒に入っている絵について、それぞれ説明する文章を書きました。高校生は必死に課題に取り組み、A4一枚の用紙はすぐ説明文で一杯になりました。25分後、絵を袋にしまいパートナーに届けて、次にパートナーから渡してもらった文章を頼りに、絵を描くことに集中しました。先生からは、「文章が分からないところはどこか。後でパートナーに伝えてあげて下さい」の言葉がありました。15分後、最初の席にもどり、パートナーと交換しました。部屋のあちこちからウワーと声が上がりました。文章から絵を描くことの難しさを実感した瞬間です。かなりうまい絵もありますが、何か分からない絵もあります。高校生は文章と絵の検討に熱中しました。先生からは、「今回の疑似体験を通して相手から学んだことを、ゆくゆくは一人でやってほしいのです。どんな文章を書く時にも、他者の視点を取り込み、セルフ・ツッコミできることが大切です」と話されました。終了時間を延長していました。

さて、高校生の描いたワークの文章と絵について、発表したり質疑応答をしたらどんな学び合いができたでしょうか。相手が何一つ知らない場合に、誤解を避けるためには、何をどういう順番で書くとよいかなどについての具体的な学び合いができたことでしょう。時間の制約が惜しまれました。

昨年に引き続き、よい文章とは生き延びるためのものであり、書くことには相手(だれに)と目的(何を)があることを、ワークを通して気づかせ、あたたかい口調でお話くださった戸田山先生に厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。  
(附属学校教諭 斉藤真子)

